

沖縄県平和祈念資料館だより



各国・地域の学習テーマ

沖縄県／沖縄戦
 広島県／広島原爆投下 長崎県／長崎原爆投下
 カンボジア／カンボジア大虐殺(ポル・ポト政権下の虐殺)
 韓国／済州島4.3事件 台湾／2.28事件
 ベトナム／ベトナム戦争
 ※各国・地域の学生は事前学習を行い、共同学習で自国の歴史について発表しました。

参加者全員で集合写真

平和への思い(ウムイ)を世界へ

沖縄と同様に、悲惨な戦争体験などを有し、体験の継承と平和構築に取り組むアジア諸国と日本の学生が共に学ぶことを通して、平和について考え、各国・地域の平和教育・平和活動に資するとともに、本事業で培った絆により平和構築のためのネットワーク形成と広く平和のために活動する人材を育成し、事業の成果を平和教育等に継続的に活用する目的で実施しました。

本事業は今年度で4回目の事業になります。実施を重ねる毎に、アジアの国々との連帯や「平和への思い」を共有することの重要性を再認識させられます。

今年度は、過去の参加者とのオンライン交流会を行い、事業参加後の「平和」に対する考え方の変化や、現在取り組んでいることなど、今年の参加者と共有しました。

JICA国別研修「平和教育における現職教育研修」

期日 2023(令和5)年1月24日

場所 沖縄国際センター

2022年度の国際協力機構(JICA)沖縄の研修で南米コロンビアの教育関係者14人が来沖し、県内の資料館を巡るなど実践的な平和教育を学ぶことを目的に実施されました。

「コロンビア国の平和教育における現職教諭研修制度強化」をテーマに、浦添市の沖縄国際センターにて、「沖縄戦の実相と教訓」や県の平和行政などについて講話しました。



コロンビア教育関係者の皆さん

「平和への思い(ウマイ)」発信・交流・継承事業

共同学習期間 2022年(令和4年)11月7日(月)～13日(土)

参加者 各国・地域から集まった学生35名(対面とオンラインを用いたハイブリッド形式)
対面形式(沖縄県・広島県・長崎県) & オンライン形式(韓国、台湾、ベトナム、カンボジア)



左から「沖縄会場」「ベトナム」「韓国」「台湾」「カンボジア」



対面とオンラインを用いた共同学習、スムーズに進行しました。

沖縄に参集した学生は、県平和祈念資料館・平和の礎、首里城公園、読谷村チビチリガマ、宜野湾市嘉数高台などでのフィールドワークを行いました。



糸満市 平和の礎



読谷村チビチリガマ



宜野湾市嘉数高台から普天間基地の眺め

共同学習最終日には、成果報告会が開かれ、各国の学習内容の報告と「アジアの若者をつくるこれからの平和」をテーマにシンポジウムが、沖縄県教職員共済会館八汐荘で開かれました。



平和について各国の若者と意見交換し、発表する学生たち。



参加者からの感想



- 今回の参加を通して、日本、特に沖縄はまだ課題がたくさん残っていることを身にしみて感じる事ができました。資料館などは個人的な旅行でも行けますが、ガマ(自然壕)はなかなか行く機会がないし、そのガマについての話は滅多に聞くことができないと思うので、もっといろいろな所を見たかったです。(広島)
 - このプロジェクトに参加して得られた経験を、私のコミュニティーや、国の若い世代に伝えていければと感じました。(カンボジア)
 - この事業に参加して、本当の多くのことを体験し、考え、学ぶことができました。多くの県外の方と交流して平和活動というものを越えて深く交流できたことが最も印象に残っています。(長崎)
 - 今回のプロジェクトを通じて、今回の参加地域についてもっと関心を持つようになりました。(韓国)
 - 5日目のディスカッションは非常に考えさせられるものがありました。哲学的に考えられるところもあり、個人的にはたくさん頭を働かせて、面白かったです。(沖縄)
 - 来年は沖縄に行けるように、みんなと一緒に勉強したいです。(台湾)
 - このプロジェクトはとてもプロフェッショナルで、私に感動を与えてくれました。(ベトナム)
- 昨年度参加した学生が作成した各国・地域の平和学習教材を公開しています。

<http://www.peace-museum.okinawa.jp/umui/>

沖縄平和啓発(継承)プロモーション事業 「世替わりを生きて」



瀬名波 孝子さん

戦前、軍事援護劇で役者デビュー。戦後、沖縄芝居の第一線で女優として活躍し、現在もなお現役である。



宮里 政欣さん

沖縄ツーリストの創業メンバーの一人。戦後の観光産業は、戦跡を巡る戦没者への「慰霊巡拝」から始まり、米民政府との交渉や、慰霊団の身元引受人を買って出た。



主和津 ジミーさん

米国人の養子となり、高校卒業前に米陸軍に入り、ベトナム戦争を経験。帰沖後は嘉手納基地で働き、高等弁務官のアドバイザーも務めた。



三木 健さん

沖縄の日本復帰に向けた日米交渉が本格化した1968～69年、琉球新報東京支社の記者として日米交渉の様子取材した。



山里 節子さん

1950年頃米国内務省ヘレン・フォスター博士の学術調査に通訳兼アシスタントとして参加。現在、石垣の自然環境保護を訴える平和活動を行っている。



遠藤 保雄さん

高圧送電線の技師として来沖し、戦後の復興に携わる。1951年から1970年頃までの沖縄の様子を8ミリ映像で記録してきた。



洲鎌 徳次郎さん

宮古島出身で戦後那覇へ。まちぐあーで傘の販売店を70年近く営む。ガープ川水上店舗など市場の変遷を知る人物。ガープ川中央商店街組合理事。



石川 元平さん

元沖縄県教職員組合執行委員長。沖縄教職員会の職員として復帰運動に関わる。初の公選主席となった屋良朝苗氏の秘書も務めた。



仲原 清正さん

石垣島伊野田地域に入植した開拓者たちの苦労を知る開拓移民2世。戦後マリア防遏の歴史を記録として継承する活動を行う。



稲嶺 成祚さん

沖縄県造形連盟会長、大学教授として後進の指導にあたる。荒廃した沖縄が戦後復興していく様子や人々の生活、学校生活、美術活動、ニシムイ(美術村)などに詳しい。

当館では、これまで多くの沖縄戦体験者の証言「戦世の記憶」「戦世からのあゆみ」などを記録し、公開してきました。今年度は、新たな取り組みとして、終戦から1972年の日本復帰までアメリカの施政権下(いわゆる「アメリカ世」)におかれた沖縄で、さまざまな体験をされた20名の方々にご自身の体験を語っていただきました。証言内容も戦後の復興、青年団活動、慰霊と観光、コザの街、高校野球、開拓移民、琉米文化会館、復帰運動など多岐にわたり、当時の沖縄社会の諸相や人々が直面してきた問題などについて知ることができます。今後、随時WEB公開していきます。



嬉野 京子さん

復帰前、渡航が厳しかった米国統治下に来沖、沖縄の現状を本土側へ伝えた報道写真家。



伊狩 典子さん

戦後、沖縄県青年団協議会や日本青年団協議会の活動にも携わる。長年方言ニュースのキャスターとして、「うちなーぐち」の普及に尽力。



大嶺 昇さん

名護や那覇琉米文化会館に20歳から日本復帰前まで勤務。切手の収集やレコード鑑賞、パンフレット等の編集技術は、文化会館時代に学ぶ。



砂川 幸夫さん

宮古琉米文化会館元職員、復帰後は県立図書館宮古分館、宮古島市立図書館長を務める。宮古郷土史研究会や、戦後の宮古の文化活動に詳しい。



平川 崇賢さん

石川東恩納で幼少期を過ごし、商工会議所青年部、市議会議員、合併時の石川市長を務めた。戦後石川の変遷を見てきた。



安里 嗣則さん

野球部監督として、1965年春にコザ高校、1989年夏に石川高校を率いて甲子園出場。1970年、コザ高校時代にはコザ騒動の現場に居合わせる。



名幸 諄子さん

米国統治時代の言論統制が厳しい中、青年団活動を通して、沖縄の実情を本土側の人々に知らせるために復帰に関する書籍の出版に携わる。教材の乏しい学校現場を支援した。



大城 和喜さん

幼い頃から社会や政治問題に関心があり、大人に混じって復帰運動の集会等に参加。高校生の時には、京都に派遣され沖縄の実情を全国に訴えた。



松本 嘉代子さん

両親がフィリピンへ移民。現地で生まれ、戦後沖縄へ引き揚げ。那覇のまちの様子や戦後の食文化の変遷に詳しい。沖縄の郷土料理の重要性とその継承及び後継者育成に尽力。



徳富 清次さん

戦後のコザを象徴する沖縄初のステーキハウス「ニューヨークレストラン」で米国の食文化と出会う。戦後基地のある街の生活を体験してきた。

博物館学芸員実習の受け入れ

期間 2022(令和4)年8月23日(火)～8月31日(水)



公園内に建立された慰霊碑について学ぶ

県内外の大学で学芸員資格を得ようとする学生を受け入れ、当館事業の一端を学ぶことを通して、学芸員としての資質を磨くことを目的として実施しています。今年は、沖縄国際大学の学生2名が実習を受けました。



資料をじっくり観察し、「モノ」と対話する

児童生徒の職場体験 インターンシップの受け入れ

期間 2022(令和4)年7月～8月



メッセージの入れ替え作業の様子 いろいろな感想を思わず読んでしまいました!

児童・生徒の望ましい職業観・勤労観を育むため、当資料館では、学校からの要望に応じて、毎年、職場体験及びインターンシップの生徒・学生を受け入れています。令和2年度からコロナ禍で中止になっていましたが、昨年3年ぶりに実施し、那覇商業高校・沖縄水産高校・小禄高校・豊見城南高校から14名の実習生を受け入れました。

実習生のみなさんは、職場体験で働くことを通して平和について幅広く考える機会となります。また、当館職員にとっても、資料館業務の重要性を再認識し、行政サービスの向上にもつながります。体験した生徒の皆さんが、自分の個性を発揮し、将来地域に貢献できる人材になることを期待しています。



ライブラリーでパネル作成作業



新聞の整理作業

資料館講習会

期日 2022(令和4)年11月30日(水)

県内の旅行・観光等の関係機関において、当館への案内業務に携わる方々を対象に、本館の設立理念・目的や役割、施設・設備及び展示内容や沖縄戦について理解・認識を深めてもらい、本館の利活用並びに案内業務の推進を図ることを目的として、県内観光業・旅行業および案内ガイド等関係者を対象に講習会を開催しています。今年は、県内17名の参加希望者がありました。



展示を案内する職員



展示を案内する職員



講話をする職員

沖縄県平和祈念資料館友の会活動報告平和学習フィールドワーク「沖縄戦終焉の地 摩文仁丘陵の深部に行く」

期日 2023(令和5)年3月12日(日)、3月19日(日)

沖縄戦終焉の地「摩文仁」の海岸は、太平洋を望む海食崖で、海拔60mの急峻な断崖の下は岩溝や岩穴が多く散在します。沖縄戦では、米軍に追い詰められた日本兵、学徒兵、避難民が身を潜めましたが米軍の帰討戦の前に多くの犠牲者を出しました。友の会では、主に平和ガイドの皆さんを対象に平和学習フィールドワークを開催しました。摩文仁岳の戦跡を巡り、これまで学んできた戦争体験者の証言に思いを寄せながら約5時間摩文仁丘陵地を歩きました。



体験者の証言を語るガイドの皆さん



出発式



摩文仁丘の深部で、学徒兵の気持ちに思いを馳せる



摩文仁海岸の地形について説明をする事務局長



沖縄戦終焉の地「摩文仁」ハンタ原の海岸

波の音、風の声、土の叫びに耳を傾けよう！

ロシアがウクライナに侵攻してから1年が過ぎた。しかし、今だに収束する気配が見えない状況が続いている。今こそ、砲弾や艦砲射撃が嵐のように打ち込まれる中を生き延びてきた沖縄戦体験者の方々の声に耳を傾け、「沖縄戦の実相と教訓」を世界に発信しなければならない。体験者は語る。人間が人間でなくなる「戦争」を二度と起こしてはならないと。起きてしまったら、取り返しがつかなくなるどころか収束する術も簡単には見つからないことは、現在の世界情勢を見ても明らかである。戦後78年間、日本が戦争に巻き込まれてこなかったのは、戦争を体験された方々の平和を希求する強い意志と努力があったからである。これからも彼らの「記憶と記録」を継承し、新しい技術を駆使しながら、次の世代へ繋いでいく方法を考え、戦争を起こさせないたゆまない努力を続けるべきである。摩文仁の丘に立ち、青い海に砕ける波の音、季節毎に変わる風の声、沖縄の先人達が眠る土の叫びに耳を傾けることができる豊かな感性を次世代の子ども達に伝えたい。

**只今、空調・設備等の改修工事中、
5月1日から開館します。**



編集・発行：沖縄県平和祈念資料館

住所 〒901-0333 沖縄県糸満市摩文仁614番地の1
URL <http://www.peace-museum.okinawa.jp/>

TEL 098-997-3844 FAX 098-997-3947
E-MAIL webmaster@peace-museum.okinawa.jp

